

平成29年度(10月~12月)日程表 **Schedule**

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
<b>2017</b>																															
<b>10</b>	普通展示(浮世絵) 山口県と浮世絵 (~10/15)																普通展示(浮世絵) 相撲絵 (10/17~11/19)														
	普通展示(東洋陶磁) 土器の魅力 (~12/24)																														
	普通展示(陶芸) オブジェ—陶造形の潜勢力Ⅲ (~2018/3/11)																														
	普通展示(工芸) 山口県の伝統工芸—萩焼・赤間硯・金工・漆芸— (~12/24)																														
	特選鑑賞室 歌川広重 名所江戸百景 よし原日本堤 (10/1~10/31)																														
	茶室 田中信行の茶室 流れる水 ふれる水 (~2018/3/25)																														
	特別展示 プリティー♡プリント 江戸の花鳥版画展 (9/16~10/22)																														
	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <span>GT 観覧券</span> <span>GT 観覧券</span> <span>工芸</span> <span>GT</span> <span>GT</span> <span>浮世絵</span> </div>																														
<b>11</b>	普通展示(浮世絵) 相撲絵 (~11/19)																普通展示(浮世絵) 忠臣蔵 (11/21~12/24)														
	普通展示(東洋陶磁) 土器の魅力 (~12/24)																														
	普通展示(陶芸) オブジェ—陶造形の潜勢力Ⅲ (~2018/3/11)																														
	普通展示(工芸) 山口県の伝統工芸—萩焼・赤間硯・金工・漆芸— (~12/24)																														
	特選鑑賞室 歌川広重 名所江戸百景 浅草田圃西の町詣 (11/1~11/30)																														
	茶室 田中信行の茶室 流れる水 ふれる水 (~2018/3/25)																														
	11/1~11/7 普通展示観覧料無料 (教育・文化通観)																														
<b>12</b>	普通展示(浮世絵) 忠臣蔵 (~12/24)																1/1まで休館														
	普通展示(東洋陶磁) 土器の魅力 (~12/24)																														
	普通展示(陶芸) オブジェ—陶造形の潜勢力Ⅲ (~2018/3/11)																														
	普通展示(工芸) 山口県の伝統工芸—萩焼・赤間硯・金工・漆芸— (~12/24)																														
	特選鑑賞室 歌川広重 名所江戸百景 深川洲崎十万坪 (12/1~12/24)																														
	茶室 田中信行の茶室 流れる水 ふれる水 (~2018/3/25)																														
	明治維新150年 萩陶芸家協会25周年記念 茶陶の現在 (12/2~2018/1/8)																														
	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <span>休館日</span> <span>★ イベント</span> <span>■ 記念講演会</span> <span>● ギャラリー・ツアー</span> <span>■ ギャラリー・トーク</span> </div>																														

★ イベント

- 開館記念日**  
 実施日●10月14日[土]  
 内容●当日展覧会をご覧頂く先着200名様に美術館オリジナルグッズをプレゼント
- 月夜のナイトミュージアム**  
 実施日●10月14日[土]  
 ①特別展示の開館延長~19:30まで  
 ②美術館内外を幻想的にライトアップ  
 ③ギャラリー・ツアー&ワークショップ  
 学芸員の解説を聞きながら、特別展示「プリティー♡プリント 江戸の花鳥版画展」を鑑賞。その後、提灯に飾りつけをおこないます。  
 時間●16:45~18:15  
 参加料●無料 ただし特別展示観覧券が必要  
 場所●本館2階展示室・エントランスロビー  
 定員●30名(受付先着順)  
 申込方法●電話0838-24-2400にて、①~③をお知らせください。  
 ①参加者の氏名、②年齢(学年)、③電話番号

■ 記念講演会 (聴講無料/当日受付先着順)

- 日時●10月1日[日] 13:30~15:00  
 講師●小笠原左衛門尉亮軒氏 (公社)園芸文化協会 会長、(一財)雑花園文庫 庵主  
 演題●「大名から庶民まで楽しんだ江戸の園芸」  
 場所●講座室(座席数84席)

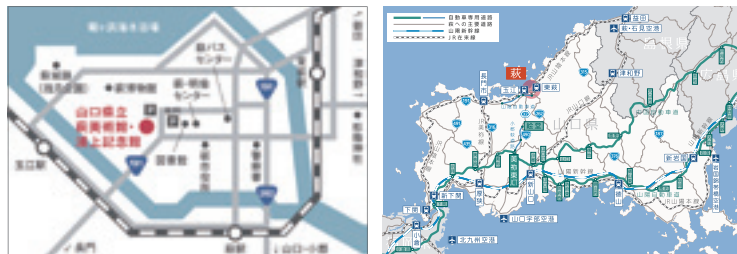
● ギャラリー・ツアー (担当学芸員による特別展示作品解説)

- 「プリティー♡プリント 江戸の花鳥版画展」  
 会期中の日曜日 11:00~12:00
- ギャラリー・トーク (担当学芸員による普通展示作品解説)  
 いずれも11:00~(30分程度)  
 10月14日[土] 山口県の伝統工芸—萩焼・赤間硯・金工・漆芸—  
 10月28日[土] 相撲絵  
 11月11日[土] 土器の魅力  
 11月25日[土] 忠臣蔵  
 12月 9日[土] 山口県の伝統工芸—萩焼・赤間硯・金工・漆芸—  
 12月23日[土] オブジェ—陶造形の潜勢力Ⅲ

※イベント詳細については美術館ホームページをご覧ください。  
 ※ギャラリー・ツアー、ギャラリー・トークへのご参加には観覧券が必要です。

■ 交通アクセス

- 【新山口駅から】**  
 ●直行バス「スーパーはぎ号」(約60分)で萩・明倫センター下車、徒歩約5分  
 ●防長バス(約70~95分)で萩バスセンター下車、徒歩約12分
- 【山口宇部空港から】** [萩・石見空港から]  
 ●萩近鉄タクシー(乗合タクシー)約70~80分(利用前日までに要予約)  
 ●「山陰自動車道」三見ICから約10分、国道191号沿い
- 【JR山陰本線】**  
 ●JR萩駅から萩循環まゝーるバス(西回り)約30分  
 ●JR東萩駅から萩循環まゝーるバス(東回り)約30分  
 ●JR玉江駅から徒歩約20分
- 【自動車】**  
 ●「中国自動車道」美祿東JCT経由、「小郡萩道路」絵堂ICから約20分  
 ●「山陰自動車道」三見ICから約10分、国道191号沿い



H A G I 萩

AUTUMN ISSUE 2017

85

題字は吉田松陰筆跡



三日月の舟松山くみ  
 耳赤の舟松山くみ  
 松風の琴の  
 山陰の

月に松上の木菟 (部分)

中短冊判錦絵 天保3~6年(1832~35) 頃  
 海の見える杜美術館蔵





茶陶としての萩焼を指して、「一樂、二秋、三唐津」や「萩の七化」なる評言が通用しています。前者は、江戸時代の文献によるとの記述を見たことはありますが、管見にして確認できていません。別に聞くところの「一井戸、二樂、三唐津」という文言の転用だろうと推測されますが、いずれもコマースのキャッチフレーズのように聞こえてしまうのは、当世風のセンスに浸ってしまったせいでしょうか。茶事に用いたい道具の高位の一つと認められるということは、御用窯として開かれた萩焼のテーゼでしたでしょうし、毛利氏萩藩の庇護もなくなった近代以降はとくに販売実績が事業継続のために不可欠ですので、それほど外れた解釈ではないと思っています。

さて、後者の「萩の七化」はどうでしょうか。「七化」とは、「種々にばけること。いろいろに変わること。七変化」(日本国語大辞典)です。どうやら「萩の七化」には、「権化」とか「化け物」といった不思議や怪異の現象をいう、おどろおどろしいニュアンスがまわりついているようです。その真意がどれほど明らかになるかわかりませんが、「萩の七化」ということばから萩焼茶碗の成り立ちを振り返ってみましょう。

#### 高麗茶碗

高麗茶碗とよばれて茶の湯の具足として今日も珍重される

陶器碗は、朝鮮半島南部の民窯で製作されたものです。

侘数寄の茶の湯が、16世紀前半に隆盛へと向かう過程で茶碗として用いられるようになりました。茶会記での高麗茶碗の初見は『松屋会記』の天文6年(1537)。おそらくその最初期においては、輸入された雑釉陶の碗の一部が茶人の眼によって茶碗として「見立て」られたのでしょう。そして、16世紀後半には三島、狂言袴、井戸などという分類名称が現れるほど、高麗茶碗は茶の湯の世界に浸透していきました。とりわけ千利休の侘数寄の理念が指導的位置を確立した1580年代以降の茶道具類の評価替えて、天目や青磁といった中国産茶碗に取って替わり、信楽や備前といった和物茶碗とならぶ茶碗の首座へ押し上げられます。

さらに文禄・慶長の役後は高麗茶碗への評価が一層の高まりをみせ、鑑賞意識の深化から御所丸、割高台、ととや、呉器などその分類が一層細やかになされるとともに、金海、伊羅保、熊川といった名称分類が現れる1640年代以降になると、それまでの朝鮮産の雑器を茶碗として「見立て」という行為から、茶人の好みがそのまま反映された道具としての茶碗という、つまり当初から茶会での使用を目的とした朝鮮産の茶碗を注文するという行為が現れはじめ、1680年代にはそういった方式での高麗茶碗の受容が定着をみるにいたると考えられます。

これは、朝鮮産陶磁器の日本化ともいうべき現象で、たとえば織部好みの力強い御所丸茶碗や遠州好みの瀟洒な伊羅保といったものがこれに当たります。このような高麗茶碗受容の歴史的展開とは、求められる機能に応じてかたちづくられたはずの器が他の価値観でもって優先的に認知されていくなかで、生産地である朝鮮半島における本来の用途から外れた別の造形物として存立する過程です。したがって、高麗茶碗の造形には、茶会における演出の道具としてのふさわしさが求められ、それを満たすための表現性が茶碗の美的価値の判断基準となったわけです。

実際に、茶碗の鑑賞では、「なり(形)」や「ころ(比)」といった立体としての茶碗の形姿にも増して、視覚や触覚への最前線としての表情をいう「ようす(様子)」が、その造形意図の表象として重要視され、質感、釉色、貫入、露胎部の土味など表面が担うすべての知覚について徹底した配慮がなされています。もちろん、こういった鑑賞重視の美的価値観は高麗茶碗に限らず、これ以降すべての茶碗について言及されるようになりました。

#### 「ようす」の変化と高麗茶碗写し

「萩の七化」は、まず、萩焼の茶碗が茶事を重ねるごとに釉調に味わい深い変化の生じることを指していわれます。いわゆる「茶慣れ」という現象です。釉面の細かなひび割れ(貫入)に浸透した液体が「染み」となったり、表面に液体成分が皮膜状に残余したりと、視覚に対して複合的に作用して「ようす」の変わることを認識することです。もちろん、1250～1280℃の高温で焼造された茶碗の器胎が変質することはありませんが、前述したような知覚の繊細な動きがそのように感じさせる、いわば「風合い」の美感なのです。

そして「萩の七化」はまた、萩焼茶碗に高麗茶碗と非常に似た作行がみられるという場合にも使われます。これには次の隠れた意味合いを含んで語られることが多いはずです。高麗茶碗の倣製品としての萩焼茶碗、すなわちオリジナルとコピーという関係がそれです。ただし、これが高麗茶碗写しの極端な例、つまり偽物づくりとして取り扱われるのであれば、それは高麗茶碗への偏愛によって導かれたあまりにも哀しい曲解といえます。茶陶として声価の高い萩焼を語る文脈のなかで、「李朝陶技の継承」とか「高麗茶碗の系譜」といったことが強調され過ぎたせいかも知れません。

#### 萩焼のオリジナリティ

たしかに伝世の萩焼茶碗には高麗茶碗との造形表現上の類似点は少なからず認められます。しかし外面的な類似は決して造形の本質に基づくものではありません。なぜなら造形活動とは、人間性の根源ともいうべき生活感情に生起するもので、高麗茶碗という朝鮮産の施釉陶磁碗の受容も、茶人の生活感情から発した、すぐれて創造的な造形活動の一面だからです。つまり、茶の湯における茶碗とは、素材や生産地を朝鮮半島に求めたということも含め、その造形性のすべてが明確に茶人の表現なのです。ですから近世初期の茶の湯では、高麗茶碗と萩焼茶碗が混同されることは決してありませんでした。

慶長19年(1614)6月16日の織田有楽の茶会で、「白き萩焼」の茶碗が使われたとする茶会記(「有楽亭茶湯日記」大日本史料12編39冊219頁)からは、萩焼の名称が早くも江戸初期から通用し、その茶碗が茶事に相応しい道具として認められていたことがわかります。また、寛永15年(1638)松江重頼の『毛吹草』という諸国産物を挙げた俳諧作法書には、長州名産に「萩焼物」と記され、慶長9年(1604)に城下町づくりが始まった萩も、すでに陶器の生産地としてその名が知られていたのです。このように高麗茶碗の偏愛が進行している江戸期の早いうちから、萩焼という陶器とその茶碗の存在ははっきりと認識されていたのです。むしろ、萩焼茶碗と高麗茶碗の類似性として注目しなければならぬものは、侘びた風情という美感ばかりでなく、実際に伝世の萩焼茶碗の形姿や部位といった器体のつくりや器表の処理といった加飾方法に、高麗茶碗のもつ造形的なさまざまな要素がランダムに採用されているところでしょう。萩焼茶碗にとって高麗茶碗とは、さまざまな造形要素の源泉であったことは間違いないものの、表現の目的ではなかったようです。

さて、ここで「萩の七化」の問題は、オリジナルとコピーの深奥に迫る、編集的創造性の次元へと分け入って行きます。(つづく) 石崎 泰之(当館副館長)

明治維新150年 萩陶芸家協会25周年記念展

「茶陶の現在 -2018萩」

12月2日(土)～平成30年1月8日(月・祝)

萩陶芸家協会、山口県立萩美術館・浦上記念館



# すもう え 相撲絵

普通展示(浮世絵)

会期 ▶ 平成29年(2017) 10月17日[火]~11月19日[日]

江戸の人々にとって、相撲は歌舞伎とともに人気の高い娯楽でした。相撲を題材とした浮世絵は、素朴な初期浮世絵の頃から見られ、錦絵の時代にジャンルとして確立しました。勝川派、菊川派、歌川派などの絵師によって、力士の化粧回し姿、土俵入り、取組、支度部屋や場所風景などを描いた作品が残されています。今回は相撲絵の歴史をたどりながら、相撲にちなんだ伝説上の豪傑や、子供力士、萩藩お抱え力士を描いた作品も紹介します。



勝川春季 「小御改 阿武松縁之助」 大判錦絵 文政10年(1827)

# ちゅうしんぐら 忠臣蔵

普通展示(浮世絵)

会期 ▶ 平成29年(2017) 11月21日[火]~12月24日[日]

元禄15年(1702)12月、大石内蔵助ら赤穂浪士47名が、本所の吉良上野介の屋敷に討ち入り、亡君の赤穂藩主浅野内匠頭の恨みをはらすという赤穂事件が起きました。この事件は後に、人形浄瑠璃や歌舞伎などに脚色され、さまざまな演目が上演されていきます。なかでも人形浄瑠璃として寛延元年(1748)に初演された「仮名手本忠臣蔵」(通称:忠臣蔵)は、仇討に関わる人々の葛藤や苦悩、人間の生死、恋愛を丁寧に描いて圧倒的な人気を博しました。今でも私たちの心を魅了する「忠臣蔵」は、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」とともに、人形浄瑠璃や歌舞伎の名作とされています。今回は、浮世絵に描かれた「忠臣蔵」をお楽しみいただけます。



歌川國芳 「仮名手本忠臣蔵 十一段目」 横大判錦絵 天保6年(1835)

# 江戸のグルメ

普通展示(浮世絵)

会期 ▶ 平成30年(2018) 1月2日[火]~2月4日[日]

本展では浮世絵に描かれた江戸の食文化をご紹介します。現代でも食べられている握り寿司、鰻の蒲焼、天麩羅、蕎麦などが誕生したのが江戸時代です。長く太平の世が続き、生産量の増えた穀類や野菜は、整備された陸運や水運によって流通しました。都市では多彩な食材の入手が可能になり、料理はより洗練され、庶民が食を楽しめるようになりました。江戸は地方から移り住んだ独身男性が多かったこともあり、江戸後期には町中に料理や屋台があふれていました。江戸の人々の食にまつわる暮らしの様子をご覧ください。

歌川広重 東都名所高輪廿六夜待夜興之圖 天保末期



# 華やぎのかたち — 染野夫妻コレクション

普通展示(陶芸)

会期 ▶ 平成30年(2018) 1月2日[火]~5月27日[日]

近現代の陶芸において、独自の器形に独自の文様をつける創造性に重きを置いた最初の作家は富本憲吉(1886-1963)でした。彼が用いた「模様から模様をつくらず」の言葉は、のちに続く作家たち、とくに色絵の作家たちにとって大きな拠り所となり、それまでの伝統的な色絵作品がもつ制約された様式を乗り越えて独創的な表現を生み出していきました。

しかしその一方で、そうした作家たちの表現には、色絵作品が本来持っていた華やいだハレの場を飾る装飾性やユーモア溢れる遊び心も垣間見えてきます。染野コレクションを築いた染野義信(1918-2007)氏が、荒川豊蔵(1894-1985)の色絵の作品に「堂々たる自己主張を通じて、見る者の心を吸い取る力」を持った「ダイナミズム」を見つつ、一方で「見る者とともに遊ぼうとする」「ユーモア」というものも感じ取っています。近現代の色絵作品には、染野氏の言葉を借りれば、「アンビヴァレント」(両義的)な要素がうかがえることも確かかもしれません。

今回は、当館にご寄贈いただいた染野夫妻の陶芸コレクションから、そうした近現代の色絵作品を中心に展覧し、作家たちが切り開いた個性溢れる新しい表現の可能性とともに、その場を飾り、心遊ばせる華やぎのうつわたちの魅力をご紹介します。

藤本能道 「色絵花置児水指」 1973年頃 当館蔵(染野義信氏・啓子氏御遺族寄贈)





# 碗の世界

普通展示(東洋陶磁)

会期 ▶ 平成30年(2018) 1月2日[火]~5月27日[日]

碗は、手中におさまるような小さい器ですが、決まった形のなかに物語があります。

碗といえば、日本人にとっては「茶碗」の名称で親しまれていますが、茶を喫するための碗は、中国・唐時代に陸羽という人物が茶について書いた『茶経』を手がかりにすると、平安時代には存在していたようです。これによると、浙江省に所在した越州窯で焼造された碗は最も評価されており、器面にかかる青緑色の釉薬は「秘色」と形容され、それまでの陶磁器には見られない玉のような美しさから人気を博しました。我が国でも写真①のような、直線的に開く碗形を作る広い口と、浅い碗部、底には蛇の目高台が付く碗の模倣品が作られました。平安時代の社会は、文化・政治の両面において貴族が中心にありました。貴重品であった越州窯産青磁碗を手に入れることができたのは、貴族などの一部の上流階級に限られていました。そのような中、人々の欲求は「緑釉陶器」という緑色を呈した鉛釉のかかる陶器で模倣品を作るまで至りましたが、溶融に非常に高い温度を必要とする硬質な青磁釉とは異なり、質感は程遠いものでした。質感の乖離には、おそらく技術的な背景があったのでしょうか。青磁釉は鉛釉(緑釉)より融点が高く、窯内を1200~1300度ともいわれる温度まで上げてコントロールする技術は高度なものでした。しかし、「形」は忠実に守られ、越州窯産青磁碗の写しであることがわかります。技術の未成熟があったにせよ、平安貴族が青磁碗に求めたのは形であったことがうかがえます。

また、同じ頃、中国・唐時代に作られた黄釉絞胎碗(写真②)や三彩印花碗(写真③)も、西方のササン朝ペルシアやローマからもたらされた銀器を模倣したもので、シャープに作られ金属器のような雰囲気を再現しています。しかし、胎土に異なった土を混ぜてマーブルのような模様をつける「絞胎」(練り上げ)や、「三彩釉」は陶器で新たに盛り込まれた特徴で、銀器の写しというよりも、それを基礎としながらも、



① 青磁碗  
唐時代・9世紀  
口径15.6cm

蛇の目高台



② 黄釉絞胎碗  
唐時代・8世紀  
口径10.5cm

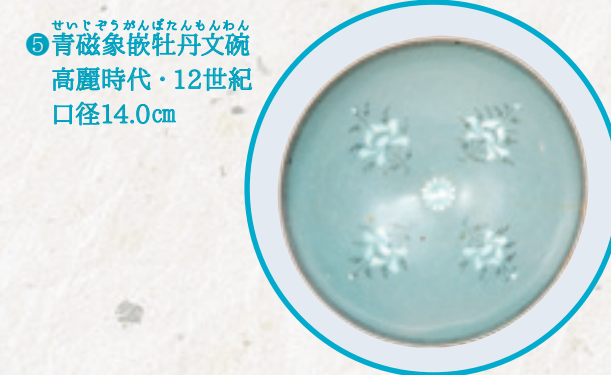


③ 三彩印花碗  
唐時代・8世紀  
口径10.2cm

いっそう華やかに見せるために独自に変容しています。

碗は変化するやきものです。本歌(オリジナル)をもとに、流行や価値観、集団あるいは個人のアイデンティティーが反映されやすい器です。素材である粘土がもつ可塑性により自在に形を作り、また模様や装飾、釉薬や顔料を選択して施すことで独自性が生まれ、人間の考えや社会状況が具現化されます。そのため、「使う」ということ以外に、所有財や配布財としての価値が発現し、それを生み出した背景や、それをめぐる物語が生まれてくるのです。

それぞれにどのようなドラマがあるのでしょうか。本展覧会では、中国・朝鮮・日本の陶磁器の碗を展示します。ぜひ会場で、「碗の世界」をお楽しみください。



④ 青磁象嵌牡丹文碗  
高麗時代・12世紀  
口径14.0cm



⑤ 粉青沙器鉄絵草文碗  
朝鮮時代・15~16世紀  
口径16.6cm



⑥ 白地黒釉碗  
唐時代・9世紀  
口径15.1cm

⑦ 禾目天目碗  
南宋時代・12~13世紀  
口径11.0cm



普通展示(茶室)

## 田中信行の茶室 流れる水 ふれる水

Flowing Water and Tactile Water

2017. 4. 8 [SAT] — 2018. 3. 25 [SUN]